



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 日本人移民渡米全盛期の「栞」：『渡米婦人心得』をめぐって                                                      |
| Author(s)        | 眞崎, 睦子                                                                            |
| Citation         | 大阪大学言語文化学, 7, 175-187                                                             |
| Issue Date       | 1998                                                                              |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/49829">https://hdl.handle.net/2115/49829</a> |
| Type             | journal article                                                                   |
| File Information | 0UJLC7_175.pdf                                                                    |



## 日本人移民渡米全盛期の「栞」

—『渡米婦人心得』をめぐる—\*

横田 睦子\*\*

There is only a hundred years' history in immigration from Japan to the United States. However, a great deal of effort has been made on the study of the early Japanese immigrants from many aspects in many fields.

My concern is to examine the Japanese immigrants and their community from 1885 to 1924, the early part of the immigrants' history, through guidebooks written by those who experienced different cultures and published in both Japan and the United States.

Among the many varieties of guidebooks, I focus on booklets and leaflets which were written in simple Japanese words and expressions. Although the rate of literate Japanese immigrants was reportedly very high, it is doubtful that all of them were able to read and understand the complicated guidebooks easily, considering the class most of the immigrants belonged to in their home country. Therefore it could be thought that many of them relied upon such short publications as booklets and leaflets.

Through this research, I hope to shed new light on certain immigrants and their community which have been neglected in previous studies.

The period, 1885-1924, falls roughly into three phases: (1) "the beginning period" when the early immigrants, including

---

\*A Study of a Leaflet for "Picture Bride" and other Women Immigrants: On *Tobeifujin Kokoroe* (YOKOTA Mutsuko)

\*\*言語文化研究科博士後期課程

government-sponsored contract laborers, crossed the Pacific Ocean for “money on trees”, (2) “the peak period” when the immigrants’ families including “picture brides,” left Japan and the number of immigrants reached its peak; and (3) “The backlash period” when “law” had made the anti-Japanese mood more visible and material and the various rights of the Japanese immigrants were denied by their host society. In each period, the guidebooks, booklets and leaflets provided up-to-date information for the Japanese immigrants and we can observe the actual circumstances of the immigrants clearly.

*Tobeifujin Kokoroe* is one leaflet for “picture brides” and other women immigrants which was published in “the peak period.” This is one of historical artifact that tells us how the early Japanese immigrants tried to survive and prosper in their new world and a different culture, without as much information as we have now.

## はじめに

日本社会がアメリカへの組織的な移民を経験したのは、歴史的に見てもわずか百年余りであるが、その間の移民研究は、時間を縦軸に、人間活動の諸分野を横軸に多様な広がりを見せている。その中の一つが、移民社会における民衆言論研究である。例えば、日本語新聞を通して各地の日本人移民社会の状況などが論証されている。又、多くの移民達の渡米の動機となった案内書、雑誌の研究がある<sup>1)</sup>。筆者は、1885年から1924年までの移民史を「初期移民渡米期」、「移民渡米全盛期」、「排日対応期」に大別し、過去の移民研究において脚光を浴びることがなかった葉、小冊子を、各時期における日本人移民、日本人移民社会を考察する資料としている。本稿ではその中の「移民渡米全盛期」に発行された「葉」、『渡米婦人

<sup>1)</sup> 例えば糸井輝子「在米日本人移民にみる異文化接触の衝撃」(『長野県短期大学紀要第45号』、1990)、「日米両国の成功雑誌に関する一考察」(『アメリカ研究第21号』、1987) などがある。

心得』が映し出す、当時の日本人移民女性たちの姿、彼女たちを取り巻く移民社会の状況、及び、論調を明らかにする<sup>2)</sup>。

## 1 「栞」とは何か

一般に、栞とは「案内、手引き」、あるいは、「読みかけの書物の間に挟んで、目印とする短冊型の紙片やひも」である。元々は枝折（しおり）と記し、山道などで木の枝を折り、目印となるような場所に掛けて、帰りの道しるべを意味するものが、転じて「栞」となったことは興味深い<sup>3)</sup>。筆者は、この意味を踏まえて、日本人移民が、ホスト社会、アメリカで生きていくための、現実的な道しるべとした栞（リーフレット）、小冊子（ブックレット）を中心とする出版物を総じて、「栞」と称する。

このような「栞」にさががけ、「初期移民渡米期」<sup>4)</sup>を中心に、渡航案内書、渡米雑誌が出版されている<sup>5)</sup>。後々まで日本の海外渡航思想の原形を成すことになった、志賀重昂の「一人の移民は三人の利益」論<sup>6)</sup>に代表される移民奨励の世

<sup>2)</sup> 筆者は修士論文、『栞』で読む日系移民史—「渡米」から「排日予防」まで』において、本稿で紹介する栞、『渡米婦人心得』の他に、「初期移民渡米期」、「移民渡米全盛期」、「排日対応期」の各時期に発行された栞・小冊子（『新渡米婦人の栞』、『排日予防の栞』、『同化の手引き』など）、又、比較資料として、数種の渡航案内書（『米国渡航案内』、『統渡米案内』、『海外立身の手引き』など）について分析を加えている。これらの資料は和歌山市民図書館所蔵のもので、同館移民資料室において閲覧を許されたものである。今回、その資料の一つ、『渡米婦人心得』の発行者である日本キリスト教女子青年会、神戸キリスト教女子青年会から貴重な資料をご提供いただいた。本稿は、『渡米婦人心得』に焦点を絞り、それらの資料と、これまでの筆者の分析が合致するものかを試みるものである。

<sup>3)</sup> 新村出（編）『広辞苑第4版』、岩波書店、1991。

<sup>4)</sup> 1885年に「官約移民」が始まり、海外に対する国内の関心が高まる。各界において移民奨励の声が生じ、渡米や海外出稼ぎの案内書が相次いで発行された。その多くが1886年から1906年頃に集中している。筆者はこの期間を「初期移民渡米期」とする。

<sup>5)</sup> 片山潜による『渡米案内』（1901年）、日本力行会、島貫兵太夫による『渡米案内』（1902年）、『最新渡米策』（1904年）などがある。

<sup>6)</sup> 特に農村部において人口過剰と事業不足に悩む日本からハワイのように賃金の高いところに一人が働きに行けば、彼が利益を得るばかりではなく、その人間が日本で占めていた地位を別の人間が得ることになり、さらにハワイに行ったものが成功して日本から物産を取り寄せれば第三の人物が利益を得る、というもの。志賀重昂『南洋時事』（志賀富士男（編）『志賀重昂全集 第三巻』、志賀重昂全集刊行会、昭和2年、p.100）

論の中で、多くの渡航希望者が渡航案内書、渡米雑誌を手にした<sup>7)</sup>。しかし、当時から識字率の高さは証明されていたとはいえ、これらの案内書が渡航希望者の多くに熟読されたのかということについては疑問がある。読者は渡米希望者の中でもある程度の教養を身につけたものに限られていたのである<sup>8)</sup>。これに対して「栞」には、次のような特徴がある。(1) 難解な用語の使用を避けたわかりやすい内容、(2) 話題、論題が絞られている、(3) 字数が少ない、(4) 小型で薄く、軽量。(1)、(2)、(3) の特徴は、これらの「栞」が読者の教育的背景を選ばなかったということを物語っている。同時に、読者が合理的に速やかに内容を把握できる特徴でもある。(4) の形態的特徴は、持ち運びが容易であることを示し、読者が、国内、或いは渡米後に他の読者の獲得に貢献したとも考えられる。

本稿で紹介する『渡米婦人心得』は、このような栞の特徴を顕著に有している(図1)。さらに、移民局というような、渡米のためには必ず通過しなければならない場で、無料で配布されたということも特筆すべきである。

## 2 「移民渡米全盛期」

### 2.1 時代概観

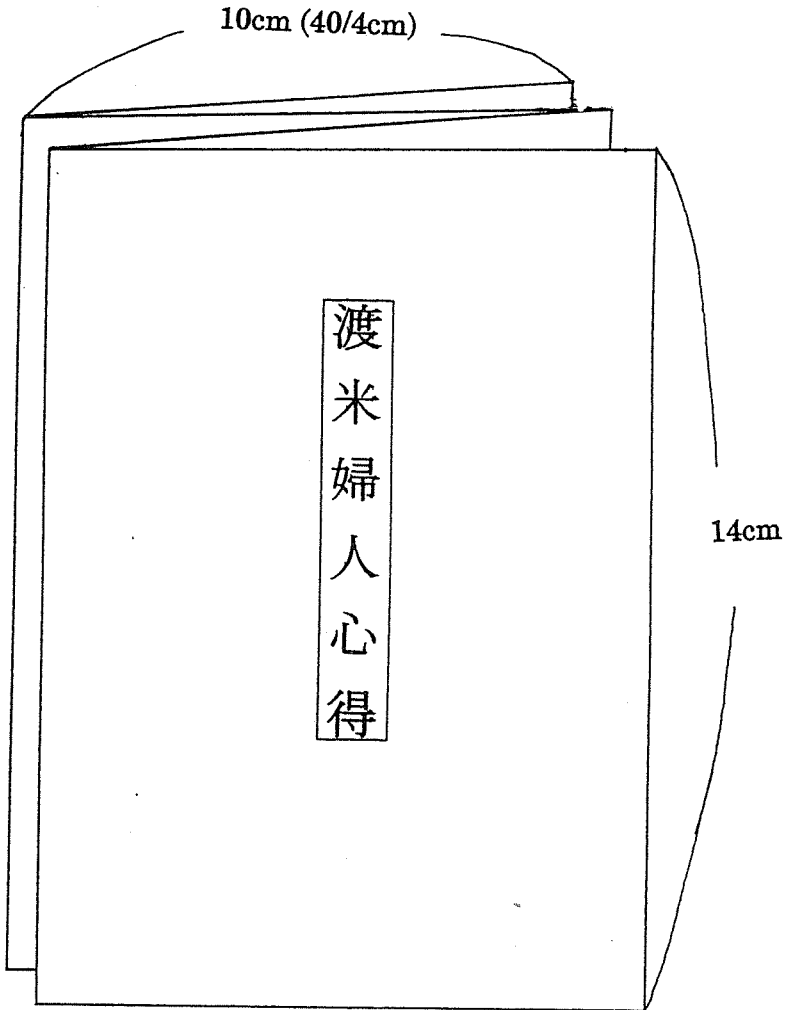
移民奨励の世論に象徴される「初期移民渡米期」を経て、急増する日本人移民へのアメリカ社会の反応は、日露戦争を前後して排日の様相を帯びようになる。「一等国」として国際社会に登場した日本の威信が損なわれることを危惧した明治政府は、自主的な移民制限を行った。1908年には日米両国間で「紳士協約」が合意に達し、出稼ぎ賃金労働者の渡米は事実上禁止されることになったのである。しかし、皮肉なことに、この「紳士協約」が出稼ぎ労働者以外の渡米者数を増加させるという結果を招いた。渡航が許されていた移民の迎娶、家族呼び寄せが相次いだのである。本稿で「移民渡米全盛期」とする時期は「紳士協約」合意の後、渡米者数が増加の一途をたどった、約10年間を指す(表1)。

<sup>7)</sup> 例えば、片山潜の『渡米案内』は「一週間に二千部売れた」といわれている。(伊藤一男『北米百年桜』、北米百年桜実行委員会、1969、p.27)。

<sup>8)</sup> 日本人移民一世の体験談を集めた『北米百年桜』は多くの日本人移民の渡米の動機を紹介しているが、このような渡航案内書を読んだ層と、いわゆる「口コミ」で渡米を決意した層の二つのパターンが観察できる。前者の多くは中学(当時)卒業後、さらに進学していた。

図1 『渡米婦人心得』

基督教女子青年会渡航婦人講習所（編）『渡米婦人心得』、横浜女子青年会渡航婦人講習所、出版年不明。（和歌山市民図書館蔵）



14×40cmの一枚の用紙を図のように折り畳んだリーフレットである。縦書き（英文部分は活字を90度回転させて印字）。このようなリーフレットには用紙の両面に情報が印刷されている場合があるが、この『渡米婦人心得』は用紙の片面のみに印字されている。

表1 1909年から1920年までの男女別日本人渡米者数

| 年代   | 男性    | 女性    |
|------|-------|-------|
| 1909 | 1,777 | 867   |
| 1910 | 1,648 | 1,039 |
| 1911 | 2,377 | 1,905 |
| 1912 | 2,930 | 2,428 |
| 1913 | 4,012 | 2,759 |
| 1914 | 5,034 | 3,428 |
| 1915 | 5,542 | 3,487 |
| 1916 | 5,869 | 3,231 |
| 1917 | 5,833 | 3,326 |
| 1918 | 7,100 | 4,043 |
| 1919 | 7,034 | 4,370 |
| 1920 | 7,630 | 5,238 |

紳士協約（1908年）以前は男性の単身渡米者が主だったが、この時期には多くの女性、子供を含む呼び寄せ移民が渡米した。

在米日本人会（編）『在米日本人史（在米日本人会、1940年）の統計をもとに作成

## 2.2 「移民渡米全盛期」の女性たち

この時期の「呼び寄せ移民」には「迎妻」の対象となった女性たちが数多く含まれている。在米日本人会は、紳士協約実施後の1909年から1920年までの日本人移民社会において「妻」と称される女性達を次のように大別した。(1) 夫の渡米前に既に結婚したるもの、(2) 夫が一時帰国した際結婚したるもの、(3) 在米の男子と写真の交換、媒介者又は当人同志の文書往復より縁談が成立し結婚届けを出して入籍したる後、在米の夫の呼び寄せにより渡米したるもの、(4) 男女とも米国にありて結婚したるもの<sup>9)</sup>。このうち、もっとも多数であったのが、(2)と(3)の方法により結婚した女性たちである。(2)に分類される女性の結婚相手となる男性が迎妻帰国者と呼ばれ、(3)により渡米、結婚した女性が、いわゆる

<sup>9)</sup> 在米日本人会（編）『在米日本人史』、在米日本人会、1940、pp.89-90。

写真花嫁である。この写真花嫁という迎妻方法は、日本古来の見合いにあたるが、この方法が「奇異な風習」、「非人道的」として排日論者、女性運動家の非難的となり<sup>10)</sup>、1920年、日本政府は写真花嫁に対する旅券をやむなく発給停止としている。

### 3 YWCA と『渡米婦人心得』<sup>11)</sup>

このような状況におかれた日本人移民女性たちをつぶさに観察したのが、YWCA の河井道子であった<sup>12)</sup>。河井は、帰国後直ちに横浜 YWCA に渡航婦人教養部を設けるなど、各地で移民事業を開始した<sup>13)</sup>。日本 YWCA による、『水を風を光を 日本 YWCA 80 年』には、以下のような記述がある。

横浜や神戸の移民局で、身体検査の順番待ちや医療手当を受けている間に、彼女らを集めて話をし、リーフレット「渡米心得」を配った。アメリカの習慣、おこりやすい誤解、不潔は嫌われること、髪、爪、靴やハンカチを清潔にしておくこと、浴室やトイレの違い、靴をはいての歩き方、アメリカの家庭生活や道徳の基準、地域社会での責任、交際の仕方、そして日本人の生活状態、労働の困難なこと、どうしたら事態を改善できるかななどを教え、国際的なあつれきを少なくするために意を用いた<sup>14)</sup>。(傍点筆者)

本稿で取り上げる『渡米婦人心得』は横浜基督教女子青年会渡航講習所発行であることから、この文中の「リーフレット」と同一のものであり、移民局において

<sup>10)</sup> 『北米百年桜』、pp.242-258。

<sup>11)</sup> 基督教女子青年会渡航婦人講習所(編)『渡米婦人心得』、横浜女子青年会渡航婦人講習所、出版年不明。『和歌山市民図書館所蔵移民資料目録』には出版年不明とあるが、1916年、同発行所から『渡航婦人講習所概覧』が出版されていることから、筆者は同年、1916年に出版されたものと推測する。表紙には横浜基督教女子青年会とともに、神戸基督教女子青年会の団体名も印刷されている。

<sup>12)</sup> 1900年に組織された日本YWCA創立委員会のメンバー。1912年には二代目の日本人総幹事に就任している。1915年日本商工会議所からの要請でカリフォルニア南部からバンクーバーまでの日本人移民社会を視察した。

<sup>13)</sup> 日本YWCA 80年史編集委員会(編)『水を風を光を日本YWCA 80年』、財団法人日本キリスト教女子青年会、1987、pp.77-79。

<sup>14)</sup> 『水を風を光を日本YWCA 80年』、p.78。

渡米を前にした女性たちに配布されたものであると考えられる。

『渡米婦人心得』は、14×40cm、1枚の用紙を山折り、谷折りと交互に折りたたんだものであり、文字どおりの葉、リーフレットである。縦書きで（英文部分は活字を90度回転して印字）、縦、28字、横、70行、約2,000字の、渡米前の女性に対する情報を、掲載したものである。

この葉の趣旨を伝える序文、「渡米婦人の心得」で始まり、本文は、「仕度の事」、「船中の心得」、「上陸の心得」の3章から構成されている。以下はその「趣旨」の部分である。

べいこく ごしゅじん たよ また しゅうがく はじ ゆかるる ごふじん がた ふねにのる  
米国に御良人を便り又は修学のため初めて渡航さる、御婦人方に乗船の  
とき じやうりく こころえ あらまし き よこはま ふねにのる ひと はや  
時から上陸までの心得の一斑を左に申します。横浜から乗船する人は早  
くから本町六丁目八十四番地の女子青年会へ来て講習をお受けなさい。凡  
ての心得となるべきことを何でも親切にお教えます。神戸、長崎か  
ら乗船した人でも銃 泊 中に講習所にお出で下されば御望みのこと  
をお教えます。一度の講習でも大層利益になります<sup>15)</sup>。

文中の女子青年会というのは、YWCAの日本語の名称である。渡航講習所とは、1916年発行の『渡航婦人講習所概覧』<sup>16)</sup>によると、横浜基督教女子青年会渡航婦人講習所であり、「渡航婦人にその心得と西洋一般の風俗を会得させる」ことを目的に1913年に設立された。実用英語、渡航準備法、外国礼式作法、西洋料理法、西洋洗濯法、外国家政法などの講習内容の他、入学はいつでも可能で、月謝が無料であることが記されている<sup>17)</sup>。このような渡航講習所は横浜について、神戸YWCAにおいても1919年に開設された。中でも、渡米する女性たちへの異文化教育の必要性を感じたアメリカからの派遣幹事、ヘレン・タッピングは広島県や長崎県といった西日本の移民送出地域に出張し、渡米に関する心得などの講義を行っていた<sup>18)</sup>。

<sup>15)</sup> 『渡米婦人心得』、原文のまま（ページ記載なし）。

<sup>16)</sup> 横浜女子青年会渡航婦人講習所（編）『渡航婦人講習所概覧』、横浜女子青年会渡航婦人講習所、1916。

<sup>17)</sup> 『渡航婦人講習所概覧』、pp.3-4。

<sup>18)</sup> 神戸キリスト教女子青年会五十年誌編集委員会（編）『あゆみ』、神戸キリスト教女子青年会、1970、pp.2-4。

本文の最初の章、「仕度の事」では、服装、荷物の入れ物、旅行中に必要なものからなる。服装に関しては、下駄履きを禁じ、「靴と長い靴下」を必ず用意することなどの記述がある。足袋を着用する場合でも、その下に靴下を着用することをすすめている。次の章の「すねや足を出さぬこと」という注意書きと呼応するものである。当時の時代背景を考えると、果たして渡航前の女性達にとって、この葉に記してあるような、いわゆる洋風の旅行スタイルを整えることが、どれほど現実的に可能だったか、或いは浸透していたかは不明であるが、和服姿では水上警察が乗船を許可しなかったため、やむなく洋服店に走ったという移民の証言も残っている<sup>19)</sup>。

次の章、「船中の心得」は、そのほとんどを、船中の男性を意識した行動を心掛ける旨の内容が占めている。例えば次のような注意が見られる。

ふねのなか きもの き い  
船中 で略服を着て居ても、すねや、あしを出さぬこと。  
だんし しつ だんし べんじょ い  
男子の室、並に男子の便所に入らぬこと。  
とくべつしんせつ だんし きをつけてみ すき み  
特別親切にしてくれる男子に警戒し身に隙を見せぬこと<sup>20)</sup>。

移民女性たちの大部分は男女の別がない「三等船室」の乗客だった。上記のような注意事項に反する行為のために、船中の女性に思いがけない様々な誤解や災いが生じていた<sup>21)</sup>。日本 YWCA の河井が、当時の船舶会社を訪ね、三等女性船客のために女性の世話係を乗船させることを提言したこともこのような状況を物語るものである<sup>22)</sup>。

最後の章、「上陸の心得」は訊問と注意の項目からなり、訊問の項では、移民官とのやり取りについて、姓名、年齢などを「ほんとうのこゝろを成る丈明瞭に答ふこと」などのように助言している。注意の項では、上陸後、無料で世話をしてくれる各地の女子青年会、その担当者の氏名が記されている。又、以下のように、

<sup>19)</sup> 『北米百年桜』、東洋経済新報社、p.56。

<sup>20)</sup> 『渡米婦人の心得』（ページ記載なし）。

<sup>21)</sup> 例えば、三千トンクラスの船では一等客室の定員は2～30名で他の3～400名は「三等船客」であった。客船の中甲板、また、時には、貨物船に頭がようやくつかない程度の「カイコ棚」をつくり、布団を敷いて寝ていた。男女の別はなかった。或いは、あったとしても薄板一枚が立て掛けてあるだった。「女性」を道具に一儲けを企む男性の乗客、船員との接触により、船中、渡米後、被害に遭う女性も少なくなかった。

<sup>22)</sup> 『水を風を光を 日本 YWCA 80 年』、p.78。

女子青年会から移民局に日本語のできる女性が派遣されていたことも記されている。

サンフランシスコ エンゼルスアイランド いんきょく にはんご じゃうず せんせい しんせつ  
桑 港の天 使 島 (移民局) へは日本語の上手なエリス先生とて親切  
な女の方が何日も出張して居りますから、何か困る時は同人に御問ひなさ  
い<sup>23)</sup>。

上記の3章、「仕度の心得」、「船中の心得」、「上陸の心得」の後に、備考欄があり、北米、ハワイの4個所の女子青年会の住所が英字で記され、そして「外国の事柄」についての講習が、国内の講習所と同様、渡米後も毎日無料で受けられると記されている。ここでいう女子青年会は1912年、渡米した日本人女性たちによって創立準備が開始された在米日本人YWCAである<sup>24)</sup>。女子青年会は、移民局からも信頼され、女子青年会の保護、保証により上陸を許されたものも多かったと報告されている<sup>25)</sup>。

この葉の興味深い点は、内容もさることながら、引用文にも見られるように、ふりがなが漢字の表記と一致していない箇所が数多く見られることである。そのような箇所は以下の通りである。

ゆかる ふねにのる をしえ ふねにのつたひと よこはまにとまっているうち ため  
渡航、乗船、講習、乗船した人、錠 泊 中、利益

以上、序文、「渡米婦人の心得」より

ねこしらえ だめ つきもの もってゆく みぐるしい あるかないか なにもいたけない ふゆ  
新調、無用、附属、持参、不體載、有 無、食欲不振、冬期

以上、「仕度の心得」より

へんなわらひ わるく きをつける わるいびやうきのうつる しんばい  
愉 笑、(眼を) 充血、警戒、病菌媒介、憂

以上、「船中の心得」より

ききただれ なまゑ とし ほんとはっきり でばり かねなし こと こちら  
訊 問、姓名、年齢、眞實、明瞭、出張、無代、事情、當方

以上、「上陸の心得」より

これらの例から、この葉のふりがなは文字(漢字)の読みより、意味に重点がおかれているということがわかる。これは渡航する女性が様々な教育的背景を

<sup>23)</sup> 『渡米婦人の心得』(ページ記載なし)。

<sup>24)</sup> 『水を風を光を 日本YWCA 80年』、pp.108-109。

<sup>25)</sup> 『在米日本人史』、pp.400-401。

持っていたということを示す点において重要である。日本人、日本人移民の母国語に関する識字率は当時から、高いものであったと立証されているが<sup>26)</sup>、識字率が高いということは、必ずしも、漢字、専門用語の多用など、どのような表現、あるいは、どのような内容の書物、文献も自在に読解し得るということとは一致しないのである。この葉の最大の目的は、当時、渡航に関する情報を、ほとんど持ち得なかった渡航者に、葉に掲載されている内容の意味するところを即座に、簡潔に、正しく、しかも、わかりやすく伝えるということだったのである。

#### 4 河上清の移民社会改善策

後に、「東京日々新聞」、「大阪毎日新聞」の在米客員記者となった河上清は、本稿で紹介した『渡米婦人心得』が発行された当時、アメリカの太平洋通信社に籍を置き、アメリカにおける日本人の生活改善と同化の促進のために尽力していた<sup>27)</sup>。1916年1月には、東京の「時事新報」に投稿して、日本人居住区域の不体裁などが、いかにアメリカ社会からの誤解を招く原因となっているかなどを紹介している。以下は、彼が打ち出した、十の移民社会改善策の一部である。

(第一) 写真結婚妻女、その他の移民を乗せたる汽船に、信用すべき世話人を乗り込ませ、船中にて日々渡米後の行儀作法、米国の風俗習慣などを教授すること。

(第二) 米国の風習に慣れ、且つ、品性ある婦人を常備して、絶えず農園及び、都会にある日本人の家庭を見舞わしめ、婦人に向かって懇切に家庭の取り締まり方、育児の方法、衣服帽子の着方、行儀作法などを説かしむること。

(第三) 言文一致、かな付きにて、時々一枚刷りの引札を発行して、あまねく在加日本人に頒ち、女子と男子との分業、女子の本分、儿女教育の方法等、その他の一般日本人の品位を高むるに必要な知識を普及すること<sup>28)</sup>。

河上の意見は、そのまま『渡米婦人心得』に具現されているものであり、大きな影響を与えたものであると考える。河上の日本人移民社会に関する改善策が発

<sup>26)</sup> Park, Robert E. *The Immigrant Press and its Control*, New York: Harper and Brothers, 1922.

<sup>27)</sup> 高橋経『還らない日本人』、同時代社、1991、p.169。

<sup>28)</sup> 『在米日本人史』、pp.93-95。

表された1916年に『渡米婦人心得』、『渡航婦人講習所概覧』が発行されているのは決して偶然ではない。

第一、第二の改善策は渡航前の移民達、特に女性に異文化圏としての、アメリカ社会に関する十分な情報が与えられていなかったこと、或は、移民達が現実的には把握していなかったため、繰り返し、情報提供、異文化教育の場を与える必要があったことを意味している。

第三では移民達に教育的背景のばらつきがあることが指摘され、河上の提案がいかに急を要するかが示されている。ここには「かな付き」の文書であれば、「かな」であれば読むことのできる誰もがその内容を読解できるという前提があり、一刻も早く「一枚刷り」の引札、つまり宣伝ビラのような形態のもので、移民達に、ホスト社会に受容され得る、生活様式の習得のための情報を普及させなければならない、という河上のメッセージが込められている。

河上の改善策はこの後、本稿で取り上げた『渡米婦人心得』だけではなく、数々の葉や小冊子を産み出す原動力になったはずである。同時に、国内、在米の日本人移民社会の指導者たちに少なからぬ影響を与えたと思われる。

## 5 結論

「移民渡米全盛期」においては、「初期移民渡米期」の移民のほとんどが男性で単身の労働者、或いは留学生であったのに対して、彼らの配偶者と家族、そして配偶者となる女性が数多く渡航している。移民史に多数の女性が登場したこの時期に、主たる読者層を男性とした渡米案内書などに遅れること約15年、初の女性向けの「葉」、『渡米婦人心得』が登場したのは時代の要請であった。同時に、これにさきがけ、この「葉」が示すような移民教育、異文化教育、特に女性向けの情報を享受することなく渡米した女性たちが経験した数々の困難の産物であり、彼女たちへ続くあらゆる層の女性たちへと示した「道しるべ」であった。その背景には、在米日本人移民社会にあって、その実態を観察し、日米関係、排日問題に関しては、日本政府による「千言萬語の弁明も効果無し」、真に必要なのは民衆レベルの移民社会の改善であると説いた河上のような在米ジャーナリストの姿がある。また、移民問題は、この時期の重要な外交問題であったにもかかわらず、これに応えたのは、国ではなく、言ってみれば、民間の、女性たちであった。女性による社会奉仕団体、YWCAが日米双方において移民局、他の自治体などの

ような公的機関において移民女性の教育、保護のために尽力していたという興味深い事実もある。この「栞」は、この時代における移民女性の姿、そして、移民女性を取り巻く環境を象徴する出版物であるといえよう。

『渡米婦人心得』は移民局、渡航講習所から、無名の移民女性たちとともに、ハワイ、そして、北米各地へと向かった。その後も移民女性たちは、『渡米婦人心得』の続編ともいえる、各地の移民社会の手になる様々な「栞」<sup>29)</sup>に出会い、さらには、後進のための枝折り、すなわち、「栞」を創り出していくことになるのである。

## 主要参考文献

- 麻田貞雄『両大戦間の日米関係』、東京大学出版会、1993  
 伊藤一男『北米百年桜』、北米百年桜実行委員会、1969  
 基督教女子青年会渡航婦人講習所（編）『渡米婦人心得』、横浜女子青年会渡航婦人講習所、出版年不明  
 神戸キリスト教女子青年会五十年誌編集委員会（編）『あゆみ』、神戸キリスト教女子青年会、1970  
 在米日本人会（編）『在米日本人史』、在米日本人会、1940  
 在米日本人会（編）『新渡米婦人の栞』、サンフランシスコ在米日本人会、1919  
 横田睦子『「栞」で読む日系移民史—「渡米」から「排日予防」まで』、大阪大学大学院言語文化研究科修士学位論文、1997  
 日本YWCA 80年史編集委員会（編）『水を風を光を日本YWCA 80年』、財団法人日本キリスト教女子青年会、1987  
 横浜女子青年会渡航婦人講習所（編）『渡航婦人講習所概覧』、横浜女子青年会渡航婦人講習所、1916  
 Park, Robert E. *The Immigrant Press and its Control*, New York: Harper and Brothers, 1922

<sup>29)</sup> 在米日本人会による『育児及産婦の栞』（1918）、『新渡米婦人の栞』（1919）がこれに続く。